

## 3年以上活動を継続しているコミュニティカフェの特徴

栗川 佳奈<sup>\*1</sup> 西田 征治<sup>\*2</sup> 綾 里穂<sup>\*3</sup> 松本 美月<sup>\*4</sup> 山本 奈美江<sup>\*5</sup>

\*1 大慈会三原病院作業療法室

\*2 県立広島大学保健福祉学部作業療法学科

\*3 三豊市立西香川病院リハビリテーション科

\*4 福山リハビリテーション病院リハビリテーション部

\*5 広島中央リハビリテーション病院リハビリテーション部

2020年8月25日受付

2020年12月24日受理

### 抄 録

本研究の目的は、活動が盛んで、地域の交流拠点として3年以上活動が継続しているコミュニティカフェの特徴を明らかにすることだった。京都、福岡、東京にある5つのコミュニティカフェを対象とし、訪問や電話で収益基盤、他機関との関わり、人が集まる工夫などについてスタッフへ聞き取り調査を行った。語られた内容を質的に分析した結果、運営が継続しているコミュニティカフェには14個の特徴があり、それらは【設備】【資金】【地域との連携】【スタッフの心がけ・意識】【プログラム・内容】の5つの項目にまとめられた。14個の特徴を先行研究と比較すると、「子育て中の母親や高齢者が利用しやすい設備が整っている」「誰でも気軽に集える憩いのベンチがある」「利用者が運営を手伝いやすい雰囲気を醸し出す」など新たに5つの特徴が判明した。先行研究で記述されていなかったこれらの特徴は新たにコミュニティカフェを設立する際のヒントになると考える。

キーワード：コミュニティカフェ，地域，運営

## 1. はじめに

近年、少子高齢化、家族構造の変化、地域行事の減少や価値観の多様化に伴い、地域の中で人と人とのつながりが弱まっている。地域の課題が複雑化、多様化している中、地域住民同士の交流や関係づくりが改めて必要になっており、「コミュニティカフェ」という取り組みが全国的に広がっている。コミュニティカフェには様々な形態があり、年代や性別を問わず住民の誰もが気軽に利用できる場であるため、地域とつながるきっかけの場として注目されている。

コミュニティカフェの定義は様々で、『飲食を共にすることを基本に、誰もがいつでも気軽に立ち寄り、自由に過ごすことができる場所』<sup>1)</sup>、『地域社会の中の居場所であり、人と人がつながることを大事にする、行くとほっとできる場所の総称』<sup>2)</sup>、『特定の目的をもっていなくても気楽に寄れる場として誰でも利用できる「公開性」、地域と社会につながる機会が用意されている「社会性」、特定の場所に立地しておりいつも開いていて人が常駐している「常設性」、民設民営の拠点を成立させるための収益事業を有機的に組み込む「事業性」を有する交流拠点』<sup>3)</sup>など、明確に定まっていない。本研究では、上に挙げた定義からコミュニティカフェにおいて重要だと思われる部分を抜き出し、「地域、社会につながり、人々と交流できる」「特定の場所に立地しており、スタッフがいる」「飲食をともにする」「年齢や対象の制限がなく、気軽に立ち寄れる」の4つを満たす場所をコミュニティカフェと定義した。

コミュニティカフェが地域とつながるきっかけの場となるためには、コミュニティカフェ自体が継続し、地域の人々が集まり、交流することが重要であると考えられる。しかし、コミュニティカフェは人々の交流が主な目的であるため、収益がもともと上がりにくい。また、認知度が低いために、人が集まらず収入が不足して閉店するなどコミュニティカフェの事業の継続は難しいとされている。そもそも、飲食事業の廃業率は高く、開業3年目では約7割が廃業するというデータがある<sup>4)</sup>。また、筆者がコミュニティカフェについて調べる中で、「コミュニティカフェの運営が軌道に乗るまでには3年かかる」「3年続けられるかどうかは鍵」という話を聞いた。コミュニティカフェの運営において、3年継続できるかどうかで地域交流の拠点になるかどうかの鍵だと分かった。

## 2. 目的

本研究の目的は、今後のコミュニティカフェの充実を図るために、活動が盛んで、地域の交流拠点となっており、3年以上運営が継続しているコミュニティカ

フェの特徴を明らかにすることであった。なお、本研究では地域の人々が集まる場所となっており、定期的に通常のカフェやイベントを開催していることを活動が盛んと定義した。

## 3. 方法

### 3.1 対象

対象は、先述のコミュニティカフェの定義を満たし、3年以上継続し、研究協力の承諾が得られたコミュニティカフェ5件であった。その選定の手順は次の通りである。まず、京都府、東京都、福岡県のコミュニティカフェをインターネットで検索し、調査の時点で活動が盛んに行われており、ホームページが更新されているものを選択すると、京都府で5件、東京都で4件、福岡県で3件の合計12件であった。その12件に電話で尋ね、3年以上継続しており、かつ、調査日程が調整できたのが下記のコミュニティカフェ5件であった。カフェA～Dの4つのコミュニティカフェには実際に訪れて調査をし、カフェEのコミュニティカフェは筆者が直接電話して聞き取り調査を行った。(表1) また、対象のコミュニティカフェがある地域の人口などは表の通りである。(表2)

### 3.2 データ収集

基本情報・運営面・スタッフ・イベント・広報の仕方・利用者について大きく6つの項目に分けてインタビューを行った。例えば、運営目的や運営主体、開催頻度、スタッフの人数や働き方、スタッフの構成、平均利用者数や利用者の年齢層、収益基盤や他の機関とのつながり、コミュニティカフェの継続に必要なことや利用者を増やす工夫などで、これらの質問項目が記載されたインタビューガイドを作成した。インタビューの対象者はコミュニティカフェの主催者、スタッフであった。カフェA～Dの4つのコミュニティカフェには実際に訪問し、筆者単独または共同研究者5名で先述のインタビューガイドを元に質問し、語られた内容をICレコーダーに記録した。カフェEのコミュニティカフェは筆者が直接電話し、インタビューガイドを元に質問し、内容を筆記した。インタビューの時間は20～90分の範囲だった。調査期間は2018年7月から2019年3月だった。

### 3.3 分析方法

ICレコーダーで記録した対象者の語りを逐語化し、分析には、逐語録と電話での調査の際に記録したメモを用いた。逐語録とメモの中から、交流が盛んであり、活動が継続していくための工夫や特徴だと思われるもの、調査したカフェの中で共通しているもの、研究対象者が強調して語ったものを抽出した。抽出した内容

表1 調査対象のコミュニティカフェの基本情報

	カフェ A	カフェ B	カフェ C	カフェ D	カフェ E
所在地	京都市	福岡市	港区	世田谷区	福岡市
開催場所	会社の1階スペース	商店街の空き店舗	借家	サービス付き高齢者住宅内	公民館
開催頻度	週6日	週2日	週5日	週6日	2ヶ月に1回
運営主体	不動産業の株式会社	商店街連合会, 大学, 地域の自主団体	区の総合支所	NPO 法人が受託運営	公民館と自治協議会が共同実施
運営目的	地域活性化 地域貢献	地域活性化	地域住民の交流の場として	地域住民の交流の場として	地域住民の交流の場として
継続年数	4年	4年	10年	5年	3年
利用者の年齢層	子ども～高齢者	子ども～高齢者	子ども～高齢者	子ども～高齢者	子ども～高齢者
スタッフの働き方	社員 パート	ボランティア	ボランティア	アルバイト ボランティア	地域の役員 ボランティア
スタッフ数	社員2名 パート5名	主催者1名 ボランティア1名	常勤2名	主催者2名 パート2名	地域の役員 約15名

表2 調査対象のコミュニティカフェがある地域の人口、高齢化率と出生率（2015年データ）

	京都市 北区	福岡市 西区	東京都 港区	東京都 世田谷区	福岡市 城南区
人口	11.9万人	20.7万人	24.3万人	88.2万人	13.1万人
高齢化率 <sup>a</sup>	27.8%	21.6%	17.6%	21.6%	21.9%
出生率 <sup>b</sup>	1.13	1.44	1.44	1.04 <sup>c</sup>	1.25 <sup>c</sup>

a : 全国平均は 26.6%    b : 全国平均は 1.46    c : 2010年データ

を類似性に従って分類し、そのまともに名前をつけ、特徴の項目名とした。これらの分析は共同研究者5名で検討し、同意が得られる形でまとめた。

### 3.4 倫理的配慮

本研究を実施するにあたり、研究対象者に書面と口頭にて説明を行い、研究協力を求めた。説明の際に、研究途中であっても中止することが可能であることを説明し、書面または口頭にて同意を得た。

## 4. 結果

インタビューデータを分析した結果、3年以上運営が継続していくための特徴として14個の特徴があり、【設備】【資金】【地域との連携】【スタッフの心がけ・意識】【プログラム・内容】の5つの項目にまとめられた。以下にこれらの項目について詳述する。

### 4.1 設備

#### 4.1.1 子育て中の母親、高齢者が利用しやすい設備がある

カフェAでは、車いすで入れる多機能トイレ、おむつ交換台やベビーチェアがあり、喫茶スペースのそばに子どもが自由に遊べるキッズスペースがあった。「子どもが騒ぐのを心配して、喫茶店に行くのをためらう母親も多いが、キッズスペースがあることで安心感が生まれる。」という語りがあった。カフェCでは高齢の利用者も安全に利用できるよう入口の段差を解消したり、カフェDでは車いすでも入れるよう入口に段差を無くし、広さを確保していたりした。

これらの内容から、子どもが遊べるキッズスペース、ベビーチェア、多機能トイレ、段差解消の整備をすることで、子育て中の母親や高齢者が利用しやすくなると分かった。

#### 4.1.2 レンタルスペースがカフェに併設している

5つのコミュニティカフェのうち、カフェにレンタルスペースを設けているのは次の3か所であった。カフェAでは、カフェの隣に多目的スペースを併設しており、会議や集会、セミナー、展示会などの会場として貸し出していた。カフェAでは、「このレンタルスペースがあったからこそここまで継続できた。最初は展示会が中心だったが、カフェに来る人がだんだんと教室やイベントを開くようになった。」という語りがあった。カフェBでは、レンタルスペースが英会話教室や勉強会、町内会の会議で使用されていた。カフェDでは、「自分の得意なことを活かして講座などを開きたい人が、気軽に借りられるレンタルスペースのニーズが高いのではないか。」という語りがあった。

これらの内容から、カフェに会議や趣味活動などで使用できる多目的スペースを併設し、地域の人に貸し出すことで地域の人がコミュニティカフェに集まるきっかけになると分かった。

#### 4.1.3 誰でも気軽に集える憩いのベンチがある

カフェA、カフェCでは店や建物の外にベンチを設置していた。カフェCでは、「地域の高齢者が買い物帰りに座って休憩していることが多く、店の外で話が弾むこともある。」という語りや、「小学生の子どもが外のベンチで集まってゲームをよくしている。ドアを開けて、靴を脱いで中に入るのはなかなか勇気がいるが、外にゆっくりできるスペースがあると気軽に場を共有できる。」という語りがあった。

これらの内容から、建物の外に休憩できるベンチを設置することで、交流のきっかけを作ることができると分かった。

## 4.2 資金

### 4.2.1 助成金を活用し、運営費や人件費に充てている

コミュニティカフェ開設時やコミュニティカフェでのイベント時なども含め、5つのカフェはすべて市などから助成金を受けていた。カフェAでは、開設して2年間、市の助成金を受けており、カフェBも開設時、市の助成金を受けていた。カフェCでは、光熱費や人件費はすべて区が負担していた。カフェDでは運営費の半分はカフェでの収入、半分は会社の助成金で成り立っていた。

### 4.2.2 喫茶以外の収益がある

カフェAではレンタルスペースの使用料は無料だが、利用する人数分の飲み物をカフェで注文してもらうという方法をとっており、レンタルスペースの貸し出しに伴ってカフェにも収益が入るようにしていた。カフェDでは、「喫茶とギャラリー、レンタルスペース、棚の貸し出しが収入源となっている。飲食だけで収益を上げるのは難しいため、様々な面から収入が得られるようにすることが大切。」という語りがあった。

これらの内容から、資金を確保するために、喫茶の売り上げ以外の収入源を作ることが大切だと分かった。

## 4.3 地域との連携

### 4.3.1 行政、町内会、地域の大学と協働する

5つすべてのカフェが地域の大学や地域の団体とのつながりがあった。カフェAでは、「学生が地域とつながるきっかけや、企業の人と関係が出来るなど、地域活動の経験を就活に活かすことができる。」という語りがあった。カフェBではイベントの際に大学生が企画を運営したりしていた。カフェCでも同じように大学生がスタッフとなっているので、「同じ年代の人がスタッフとして入ると入りやすいという意見が利用者からあった。」という語りがあった。カフェDでは「若い人がいることで新しいアイデアがもらえ、場に活気が出る。」という語りがあった。

また、カフェCではカフェの設立にメンバーとして町会長が加わっており、「地域の人も、町会長が受け入れているのだから信頼できるといった雰囲気があった。地域をよく知っている人抜きに進めるのは難しい。」という語りがあった。

これらの内容から、行政や町内会の協力を得ることで広報や周知がしやすいだけでなく、地域住民の不信感を取り除ける効果があると分かった。また、地域の大学や高校との関係があることで、若い世代の意見が取り入れられ、スタッフとしての人材確保にも繋がることが分かった。

## 4.4 スタッフの心がけ・意識

### 4.4.1 利用者が運営を手伝いやすい雰囲気を醸し出す

カフェCでは、「掃除や後片付けの際に意識的に足りないところや隙を作り、あえて完璧にしないことで、利用者に協力してもらいやすい雰囲気を作る。手伝いたいけど手伝っていいのかと不安そうな人には、いっしょに手伝ってくれませんか、とさりげなく声かけをすることが大切。」という語りがあった。

この内容から、準備や片付け、掃除などスタッフが全てを行おうと気負わず、何か協力したいと思っている利用者が自然にお手伝いできるような雰囲気を作り、利用者とともに場を作っていくことが大切だと分かった。

### 4.4.2 スタッフが運営の負担を負いすぎない

カフェCでは、「スタッフ側とお客さん側がきっちり分かれないうようにしている。スタッフや運営側が(掃除や後片付けなど)やることを細かく決めて、全て自分たちでしようと思うと大きな負担となる。毎日運営するとなると完璧にするのは無理。」という語りがあった。カフェEでは、「スタッフ側の負担が大きすぎると継続できないため、あまり根をつめすぎずに、利用

者に頼めることは頼むようにしている。」という語りがあった。

これらの内容から、スタッフ側の負担が大きすぎると継続できないため、無理のない運営をすることが大切だと分かった。

#### 4.4.3 スタッフ間で情報を共有している

カフェDでは、1日の始めにミーティング、終わりにふり返りの会を行い、気になったことなどをスタッフ間で情報共有している。カフェEでは、「初めて利用する人や1人でいる人には、さりげなく声をかけるようスタッフ全員で意識している。毎回カフェ後に必ず今回のふり返りをする会を開き、良かった点や反省点、気づきなどをスタッフ全員で共有し、次に活かすようにしている。」という語りがあった。

これらの内容から、1日の始まりと終わりにミーティングを行うなどスタッフ間で情報を共有する時間を設け、意見交換をすることで、今後のコミュニティカフェの活動に活かせることが分かった。

#### 4.4.4 スタッフがやりがいや楽しさを感じている

カフェCでは、「大変なことはたくさんあるし、やめようと思ったことは何回もあるけど、なんだかんだ楽しい。利用者の人からアイデアが出て、新しいイベントをしたり、イベントの内容の形が変わっていったりするのが面白い。」という語りがあった。カフェEでは「町のために何かしたいという思いややりがいを持ってスタッフはみんなやっている。自分たちも楽しむことを心がける。」という語りがあった。

これらの内容から、スタッフ自身が運営や活動にやりがいを感じ、楽しんでいることが分かった。

#### 4.4.5 目的が明確で、信念を貫いている

カフェAでは「地域の人がつながる場所になればいいなと思ってやってきた。最初は手探り状態で、人もなかなか集まらなかった。なんとか3年続けていく中で、だんだん人が集まるようになった。」という語りがあった。カフェBでは「町に人が集まる拠点があることで人が活発になる。2年半までは人が集まらず、やめようかなと思ったが、3年目から効果が目に見えてきた。4年目の今は、やってよかったと思う。継続してやめないことが大切だと感じる。」という語りがあった。

これらの語りから、コミュニティカフェの目的が開設時から明確で、コミュニティカフェが地域住民の交流拠点となると信じ、人が集まらず成果が出ない時も諦めずに続けることが大切だと分かった。

### 4.5 プログラム・内容

#### 4.5.1 参加しやすい活動がある

カフェAでは毎月1回、歌声喫茶というギターやマンドリンなどの生演奏とともに歌を歌うイベントが開催されており、地域の高齢者が多く参加する人気の

イベントとなっている。「1人で歌を歌うのは恥ずかしいという控えめな人でも、みんなといっしょなら歌いやすい。」という語りがあった。カフェCでは大学の落語研究サークルの部員が落語を披露する落語会が定期的開催されており、人気のイベントとなっている。「落語は男女問わず高齢者が多く集まる。何かをするわけではなく、聞いているだけなので、参加しやすいのかもしれない。こういう参加しやすいイベントはコミュニティカフェを知ってもらおう上で大切。」という語りがあった。カフェDでもバンドの生演奏とともに歌を歌う歌声喫茶が月に1回開催されている。「みんなで歌を歌うことで一体感が出る。この一体感が人気なのではないか。」という語りがあった。

これらの内容から、利用者が参加しやすい活動をすることが大切だと分かった。また、参加しやすい活動としては、みんなで歌を歌う、落語を聞くといった場所を共有するようなプログラムが良いと分かった。

#### 4.5.2 利用者のやりたいこと、趣味が活動に反映されている

カフェBでは、「なにか特別なイベントをしようというより、カフェに来た人の『ここで何かをやりたい』という気持ちを応援するようにしている。」という語りがあった。カフェCでは「みんなそれぞれ得意なことがある。それぞれの特技、趣味、興味を地域の人におすそ分けして、みんなで楽しむイメージ。その人の得意なことを地域で活かすために、サポートをしていく。」という語りがあった。カフェDでは「スタッフはイベントをやる人じゃなくて、繋げる人。やりたいことがある人と場所を繋ぎ、地域の資源をコーディネートする役割を持つ。」という語りがあった。また、カフェEでは、コミュニティカフェで行いたい活動を利用者がシール投票で選ぶようになっており、「中古本の販売」が投票で多かったため、町の本屋や地域の人々と協力し、中古本を販売する古本交換市というイベントを開催した。

これらの内容から、スタッフ側がイベントを企画するだけでなく、地域の人々の興味ややりたいことを活かせるよう支援することが大切だと分かった。

#### 4.5.3 継続利用することによる特典がある

カフェAでは飲食代500円ごとに1ポイントが付き、ポイントカードに貯まったポイントによって飲み物が値引きになる。「居心地の良い雰囲気を作るだけでなく、来店する楽しみを作り、リピーターになってもらえるようにしている。」と語りがあった。カフェEでは出席カードを配布し、5回利用してポイントが貯まると市の指定の有料のゴミ袋がもらえるようにしており、「特典がもらえるようにすることと人が集まりやすいし、きっかけづくりにもなる。」という語りがあった。

これらの内容から、継続して利用することによる特

典を作ることが大切だと分かった。

### 5. 考察

今回、京都、福岡、東京にある5つのコミュニティカフェの運営者にインタビュー調査を行った。調査対象者から語られた内容を分析した結果、運営が継続しているコミュニティカフェには「スタッフがやりがいや楽しさを感じている」など14個の特徴があり、それらは【設備】【資金】【地域との連携】【スタッフの心がけ・意識】【プログラム・内容】の5つの項目にまとめられた。

図1のとおり、今瀬ら<sup>5)</sup>は、コミュニティカフェの

継続に必要な条件として3つのことを挙げ、小谷野ら<sup>6)</sup>は、コミュニティカフェの利用者増加と運営継続に対する工夫として5つのことを挙げている。

本研究で抽出された14個の特徴のうち、9個がこれらの先行研究で運営の継続の条件や工夫として述べられていたもの、またはそれに近いものであった。設備面では「レンタルスペースがカフェに併設」、資金面では「助成金を活用し、運営費や人件費に充てる」「喫茶以外の収益」、地域と連携の面では「行政、町内会、地域の大学と協働」が挙げられた。また、スタッフの心がけ・意識の面では「スタッフが運営の負担を負いすぎない」「スタッフ間で情報を共有」「スタッフがやりがいや楽しさを感じている」「目的が明確で、信念を

	本研究から導き出された特徴	オーバーラップ (注1)
【設備】	1.子育て中の母親,高齢者が利用しやすい設備がある	
	2.レンタルスペースがカフェに併設している	⑦
	3.誰でも気軽に集える憩いのベンチがある	
【資金】	4.助成金を活用し、運営費や人件費に充てている	②④
	5.喫茶以外の収益がある	②
【地域との連携】	6.行政、町内会、地域の学校と協働する	④
【スタッフの心がけ・意識】	7.利用者が運営を手伝いやすい雰囲気を醸し出す	
	8.スタッフが運営の負担を負いすぎない	①③
	9.スタッフ間で情報を共有している	①
	10.スタッフがやりがいや楽しさを感じている	①
	11.目的が明確で、信念を貫いている	①
【プログラム・内容】	12.参加しやすい活動がある	
	13.利用者のやりたいこと・趣味が活動に反映されている	⑧
	14.継続参加することによる特典がある	



先行研究で示された特徴
【コミュニティカフェの継続に必要な条件 (今瀬ら, 2015)】
①スタッフが運営目的を理解し、共感し、楽しさを感じながら活動する
②飲食以外の継続した固定収入を得られる事業計画をたてる
③無理をしない身の丈に合った運営をする
【コミュニティカフェの利用者増加と運営継続に対する工夫 (小谷野ら, 2017)】
④商店街や地元団体など地域に根ざしたものから支援を受けている
⑤イベントや教室などの開催数が多い
⑥独自の商品を作る
⑦情報スペースやレンタルスペースなどがある
⑧1人客が入りやすい空間を作る

注1:オーバーラップの番号は、「本研究から導き出された特徴」の内容と同様の内容を示す先行研究の項目番号である。

図1 本研究から導き出された特徴と先行研究で示された特徴の比較

貫いている」、プログラム・内容の面では「参加しやすい活動」が挙げられた。これら9つの特徴は先行研究でも述べられており、今回の研究でも挙げられたことからコミュニティカフェの継続に関して重要な要素といえる。

今回の研究で新たに抽出されたのは以下に示す5つの特徴である。ここでは、これらの5つの特徴が挙げられた理由や背景を考察する。

1つ目の「子育て中の母親、高齢者が利用しやすい設備がある」が特徴として挙げられた理由として、設備面の充実によって子育て中の母親や高齢者の利用者の安心感が生まれ、行きやすさや長時間の滞在が可能になったからだと考える。高齢者が外出をためらう要因として、転倒不安感が最も多い理由として挙げられており<sup>7)</sup>、転倒につながる1つの環境要因として段差が挙げられる。高齢者にとっても、段差が解消されている、車いすでも入れる多機能トイレがあるといった環境は行きやすさや安心感につながる。また、現在のコミュニティカフェの問題点として、建物の老朽化や狭さ、段差への対応が挙げられている<sup>8)</sup>ことから、設備面へのアプローチが重要だと考える。

2つ目の「誰でも気軽に集える憩いのベンチがある」が特徴として挙げられた理由として、コミュニティカフェ内だけに交流の場所をとどめないことで、場への利用のしやすさ、新規の利用者の獲得につながったからだと考える。子どもの利用を増やしたいと考えたコミュニティカフェのスタッフが、カフェの外にあるベンチに人の大きさほどのぬいぐるみを置いたところ、子どもに大人気となり、子どもが立ち寄りきっかけになった話もある<sup>9)</sup>。さらに、兵庫県南あわじ市の沼島には、多くの民家の軒先に「バツタリ」と呼ばれる腰掛けがある。住民が集まるとバツタリに腰を掛け、井戸端会議が始まるなど、家の前で話をすることで交流が始まることがある<sup>10)</sup>。このように、カフェの建物内だけでなく、建物の外にも交流のきっかけとなる仕掛けを作ることが、コミュニティカフェへ新たな利用者を獲得するのに有効だと分かった。

これまで述べてきたようなハード面に関する特徴については、先行研究で触れられていなかった。コミュニティカフェの継続において、ソフト面だけでなくハード面も考慮することが重要だと明らかになった。

3つ目に、スタッフの心がけ・意識の項目で「利用者が運営を手伝いやすい雰囲気を出す」が新たな特徴として挙げられた。倉持<sup>1)</sup>は、コミュニティカフェの利用者が皿洗いやイベントのチラシ作りや準備をするなど利用者が「サービスを受ける側」であるだけでなく、「サービスを提供する側」になることで、利用者は「自分がその場で、誰かの役に立っている」という自己肯定感を得ると述べている。つまり、自分なりに関わることで他者の役に立ち、自己肯定感を得る体

験を重ねることで、コミュニティカフェが自分の居場所となり、継続利用につながると考える。コミュニティカフェは通常の飲食店と異なり、スタッフが一方的にサービスを提供するのではなく、スタッフと利用者がともに場を創っていく点が特徴である<sup>1)</sup>。サービスを提供されてばかりだと「申し訳ない」といった心理的負担が生じる場合がある。そういった利用者の心理的負担を軽減するためにも、運営の手伝いをしてもらうことは効果的だと考える。

4つ目の「利用者のやりたいこと・趣味が活動に反映されている」が特徴として挙げられた理由として、自分の好きなことができること自体がコミュニティカフェを利用する理由だからだと考える。樋野<sup>11)</sup>は、高齢者における居場所の利用実態と意義の研究で、高齢者の居場所の選択理由として最多は「自宅から近い」ことであり、次に「自分の好きなことができる」ことであった。コミュニティカフェでも同じことが言えると考えられる。コミュニティカフェは地域の交流拠点となるが、利用者は交流を目的に利用するのではなく、「自分の好きなことができる」ことを目的として利用し、結果的に好きなことを通じて利用者同士の交流が生まれるのだと分かった。この特徴は様々な年代が多く、人口が多い都会のコミュニティカフェならではのものだと考える。

5つ目の「継続利用することによる特典がある」が特徴として挙げられた理由として、利用者に見えぬ形で利益があることは継続利用のきっかけやモチベーションの維持につながるからだと考える。継続利用でポイントが貯まることで飲食が割引される、市の指定のゴミ袋がもらえるといった、分かりやすい特典があることで、「特典のためにあと数回は続けて参加してみよう」と思うきっかけやモチベーションになると考える。

以上の特徴は、コミュニティカフェの運営者にとっては特別なことではないと感じるかもしれないが、今回の研究で明文化したことは意義があると考えられる。これらは、新しいコミュニティカフェの開設や既存のコミュニティカフェの運営継続へのヒントになるだろう。

## 6. おわりに

今回調査したコミュニティカフェは、法定人口が50万人以上である政令指定都市（居都市、福岡市）、東京都特別区（港区、世田谷区）にあるコミュニティカフェであった。これらの地域には、人口が多く、年齢層に大きな偏りがないという点が共通している。都市部や比較的人口が多い地域でコミュニティカフェを開催する上では、これらの特徴を活かせると思われる。しかし、もともと人口が少ない地域や高齢者ばかりの

地域では利用者が限られ、毎日のコミュニティカフェの運営は難しい。こういった人口の少ない地域や高齢化が進んだ地域でコミュニティカフェを開催する場合は、地域の特性を考慮し、新たな方法を考えなければいけないだろう。

## 7. 文献

- 1) 倉持香苗：コミュニティカフェと地域社会－支えあう関係を構築するソーシャルワーク実践－。東京，明石書店，139-169，2014
- 2) 長寿社会文化協会：コミュニティ・カフェをつくらう！。東京，学陽書房，12-15，2007
- 3) 横浜コミュニティカフェネットワーク：カフェ型中間支援機能の創出・強化・普及啓発冊子。神奈川県，横浜市市民局，5-10，2018
- 4) livedoor NEWS：「10年間生き残れるのは1割…厳しさ増す飲食店経営の現状」2015年1月10日記事。（オンライン），入手先 <<https://news.livedoor.com/article/detail/9660849/>>，（参照 2020-10-18）
- 5) 今瀬和哉，松行美帆子：コミュニティカフェの継続に必要な条件に付いての－考察－横浜市・川崎市のコミュニティカフェを事例として－。公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告書，13：151-155，2015
- 6) 小谷野結希，竹原彩ほか：コミュニティカフェの運営実態とタイプ別の課題に関する研究－1都3県を対象に－。公益社団法人日本都市計画学会都市計画報告書，15：337-340，2017
- 7) 渡辺長，前田千明：地域在宅高齢者の外出に影響する因子について。帝京科学大学総合教育センター紀要総合学術研究，1：1-9，2018
- 8) 大分大学福祉科学研究センター：2011年コミュニティカフェの実態に関する調査結果（概要版）。大分大学福祉科学研究センター，（オンライン），入手先 <[http://www.hwrc.oita-u.ac.jp/publication/file/Text\\_2011\\_2.pdf](http://www.hwrc.oita-u.ac.jp/publication/file/Text_2011_2.pdf)>，（参照 2020-10-18）
- 9) 倉持香苗：人の交わりから生まれる地域づくり－地域拠点としてのコミュニティカフェの可能性－。作業科学研究，11：28-38，2017
- 10) 神戸新聞 NEXT：「バッテリーでゆったり？沼島の休日体験いかが？」2019年3月15日記事。（オンライン），入手先 <<https://www.kobe-np.co.jp/news/odekake-plus/news/details.html.news/odekake-plus/news/pickup/201903/12149153>>，（参照 2019-11-10）
- 11) 樋野公宏，石井儀光：高齢者における居場所の利用実態と意義。日本建築学会計画系論文集，79：2471-2477，2014



## Characteristics of community cafes that have been active for over three years

Kana KURIKAWA<sup>\*1</sup> Seiji NISHIDA<sup>\*2</sup> Riho AYA<sup>\*3</sup>  
Mizuki MATSUMOTO<sup>\*4</sup> Namie YAMAMOTO<sup>\*5</sup>

\*1 Department of occupational therapy, Daijikai Mihara Hospital

\*2 Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

\*3 Department of occupational therapy, Nishikagawa Hospital

\*4 Department of occupational therapy, Fukuyama Rehabilitation Hospital

\*5 Department of occupational therapy, Hiroshima Central Rehabilitation Hospital

Received 25 August 2020

Accepted 24 December 2020

### Abstract

The purpose of this research was to clarify the characteristics of several community cafes, which have been active for over three years as the base of regional exchange in the community. We interviewed the staff of five community cafes in Kyoto, Fukuoka, and Tokyo about the revenue base, involvement with other organizations, and ways of gathering people via in-person visits and the telephone. As a result of a qualitative analysis, we identified 14 characteristics in the community cafes which have been active for over three years. These characteristics were summarized in five items: equipment, finance, cooperation with the area, awareness of staff, and program/content. Comparing the 14 characteristics with data from previous research, five new characteristics were discovered: "facility that elderly and mothers raising children can use easily," "rest benches that anyone can easily gather," "atmosphere that makes user help to run a community café," "activities that user want to do or have interests," and "benefits of continuing to participate for users." We regard this research as significant because we have discovered new characteristics which have never described in previous research.

**Key words:** community cafe, local, management